

民衆へのさまざまなアプローチ

——赤澤史朗・北河賢三・黒川みどり編

『戦後知識人と民衆観』評

長妻 三佐雄

本書は、『文化とファシズム』（日本経済評論社、一九九三年）、『戦後日本の民衆意識と知識人』（年報日本現代史 第八号、二〇〇二年）、『戦後地域女性史再考』（年報日本現代史 第一八号、二〇一三年）等の成果を生み出してきた日本現代思想史研究会の最新の成果であり、以下の内容から成る。

溝上泰子論（鬼嶋淳）／丸岡秀子における知識人と民衆（松尾純子）／写真家濱谷浩のグラフ・キャンペーン（井上祐子）／大石又七の思想（小沢節子）／桑原武夫の戦後思想（根津朝彦）／神島二郎の一九五〇年代と思想史研究の模索（戸邊秀明）／丸山眞男における「精神の革命」と「大衆」（黒川みどり）／「藤田省三における知識人像と民衆観の変容」（赤澤史朗）／鶴見俊輔の思想・方法と大衆の思想（北河賢三）

本書「はじめに」で編者の一人である赤澤が述べているように、丸山眞男や清水幾太郎、竹内好といった著名な知識人を対象とした戦後思想に関する研究は相当数存在している。また、よく知られている数人の知識人を対象にして、メンバーがそれぞれ担当する人物を決め、その思想的な営みやテクストを比較

検討しながら行う共同研究もいくつか存在している。これらの研究のなかで取り上げられた知識人は数多くの文章を残している場合が多い。このような知識人を対象にした研究は同時代の言説空間を知るうえでも重要であり、戦後思想においても複数の知識人の代表的なテクストを分析することで、その時々政治・社会的な問題や思想的な課題を知ることができる。だが、知識人の言説を対象にするだけでは捉えられない「民衆意識・思想」（赤澤）や感情があり、それらをできるかぎり明らかにすることも同時代の精神状況を知るうえで看過することはできないだろう。公共空間に自らの声を届けることのできない社会的な弱者の声を代弁することが知識人の役割の一つだとしても、同時代の知識人が民衆の多種多様な姿を十分にくみあげることには難しいのではないだろうか。

出原政雄編『戦後日本思想と知識人の役割』（法律文化社、二〇一五年）では、従来の知識人論を参考にしながらも、知識人の枠組みを広くして、これまで対象とされてこなかった人物も知識人として取り上げた。同じく本書でも、論壇で活躍している知識人だけではなく、より広く地域社会や文化運動で重要な役割を果たした人物の営みにも焦点が当てられている。民衆の思想や意識を重視しながらも、それらを民俗学や民衆思想史のように直接対象とはせず、知識人と民衆の関係そのものを考察し、知識人が民衆をどのように捉えたのかを検討している。多くの知識人が民衆の思想や意識の重要性を認識しながらも、ど

のように捉えればいいのか、その方法を模索していた。複雑であり、多様であり、概念化することの難しいそれらをどのようにして捉えるのか。本書では、戦後の知識人たちが民衆に迫ろうとしたさまざまなアプローチを検討している。それとともに、民衆の捉え方や知識人と民衆の関係を検討することで、戦後日本において変容する知識人の役割を明らかにしようとする。従来の知識人論ではなく、知識人の民衆観に焦点をあてることで、民衆の思想や意識をくみとるための方法について考察するとともに、知識人という概念そのものを検討しているのである。

赤澤は、戦後思想に関する「民衆意識・思想を重視したいいくつかの研究史整理」（本書一〇頁）として、安田常雄の「思想史と現場のあいだ——戦後日本思想史研究の方法を通して」（『社会思想史研究』二四号、二〇〇〇年）や安丸良夫の「戦後知の変貌」（安丸・喜安朗編『戦後知の可能性——歴史・宗教・民衆』所収、山川出版社、二〇一〇年）などを取り上げ、その意義と問題点を記している。また「論壇の動向」を捉えたものとして、小熊英二『民主』と『愛国』——戦後日本のナショナルリズムと公共性』（新曜社、二〇〇二年）を挙げ、これらの先行研究が「戦後の知識人が戦争体験を背景に思想形成をしたことなど、その位置づけを考える上での重要な観点を示唆しており、参考になる」（二二頁）としている。だが、これらの研究の意義を認めながらも、たとえば小熊の研究について、赤澤は「戦後思想は論壇をリードする知識人の思想によって捉えることが出来

るのであり、同時代の人々の「心情」はリーダー的知識人によって汲み上げられ代弁されるという理解に立っている点で、疑問が残る」（一一頁）と述べる。一九五〇年代には「論壇的知識人」だけではなく、「社会・文化運動のリーダーなど新しい知識人」が登場し、「民衆思想」が発見された（二二頁）。「論壇的知識人」を対象にした思想研究だけでは捉えることのできない「民衆思想」への眼差しが、本書の方法と対象に強い影響を与えている。すなわち、本書では戦後知識人の「その民衆への向き合い方」を検討し、「民衆への距離の意識」や「民衆への共感」を手がかりに、「その知識人としての生成と変転の過程を明らかに出来ないかと考え」、「可能な限り、その知識人の生涯を通じてその思想と役割を明らかにし、同時代のなかでの他の知識人と比較して考察しよう」と試みたのである」と（一一——一二頁。清水幾太郎は「匿名の思想」（『世界』一九四八年九月）の重要性を指摘したが、民衆の思想や感情は現実の生活を考察するうえで無視しえない。人びとの生活感情に支えられることが「思想」を実践するためには必要であり、民衆から乖離した思想は少なくとも現実の生活を動かすものにはなりにくい。知識人の多くが自己の内部における文脈と同時に、それぞれの言説空間のなかでテクストを発表している。それが発表された媒体とともに、彼らが読者をどのようにみていたのか、また、民衆をどのように捉えていたのかと言説空間を考えると重要になるだろう。

安丸・喜安編『戦後知の可能性』の「まえがき」で喜安が指摘するように、戦後思想においては二項対立的な図式を前提にして議論される場合が多かったが、本書ではこのような方法論を慎重に避けている。前近代と近代、土着と西洋化などといった二項対立的な図式を採用しておらず、さらに肯定的な価値観と否定的な価値観を前提にして、それを基準に各思想家やテクストを位置づけることもしない。また、本書全体を通して、あるべき民衆像や理想とする知識人と民衆の関係も想定されてはいない。そして、民衆や大衆に直接的に関係するテクストだけを対象にして、そこから各知識人の民衆観を抽出するという方法をとらず、対象となった知識人の思想的な営みを同時代の文脈のなかで位置づけながら、民衆観を浮かびあがらせている。本書が全体として民衆観というテーマで統一性をもたせながらも、民衆に対するさまざまなアプローチを描くことに成功しているのは、このような方法論を採用したからであろう。

本書では、知識人と民衆という区別はしているが、それを二分法で捉えることはできるかぎり避けようとしている。知識人と民衆の関係も多様であり、本書全体の意図としてさまざまな知識人と民衆の関係を描き出そうとしているように思われる。赤澤は「一般的に今日においては、知識人と民衆（大衆）の違いは、それほど截然と区別され得るものとはいえない」（九頁）と指摘する。したがって、「知識人」を同時代の政治・社会的な問題を広く扱う著名な人物に限定していない。「狭義の

知識人に限らないで、地域の社会的・文化的な運動のリーダーや、現場重視のルポルタージュ的な発信者・表現者を含めて考える傾向」があり、本書でも、このような「広義の知識人」が念頭に置かれている。「広義の知識人」にあつても、「働きかける者と働きかけられる者、知識人として立とうとする自己意識と周囲の民衆と意識の切れ目といったものが存在する」のであり、そこに知識人と民衆の区別を見ている（九頁）。

「はじめに」では、つぎの四点が「収録した幾つかの論文に共通する視角」として設定されている。第一に「知識人ということを広く捉えること」、「高等教育を経た知識人・文化人でない人物」（一三頁）をも対象としたことである。第二に「取り上げた人物の民衆観がどんなものかに着目する点」である。そして、本書で取り上げられた知識人の多くが「民衆における個の自立性の追求」を課題にしていたことに注目している（一四頁）。第三に「その知識人の思想的特徴を、その人物の思想の形成・変遷過程の中で明らかにすること」（一四頁）である。第四に、その人物の「従来の表現の仕方」に対する批判や「その人物に特有の独自性をもった表現の追求」に注視した点である（一四頁）。第二、第三の視角は収録されている論文すべてに共通している。溝上泰子や丸岡秀子のように地域社会で民衆に寄り添いながら著作を発表した人物から、桑原武夫や丸山眞男のような「狭義の知識人」に至るまで、さまざまな知識人の民衆観に着目した論文が収録されている。第一と第四の視角は

すべての論文に共通するわけではないが、とくに本書の魅力になっっているように思われる。溝上や丸岡、それに濱谷浩や大石又七といった知識人の営みを、戦争体験をふくむ「戦後」という空間のなかで捉え直したことで、それぞれが民衆との「つながり方」(三七頁)を模索する様子を明らかにしたことは意義深い。

たとえば、山陰農村女性の姿を描いた溝上が、村の人びとから「姉さん」と呼ばれている山代巴のことをうらやましく感じていたことを鬼嶋淳は指摘する。一九五〇年代の日本では「啓蒙する側と啓蒙される側」には、「間隙」があるようにみえた(三六―三七頁)のであり、その「間隙」を埋める関係性を築くために、溝上が苦心していたことが記されている。集団での話し合いだけではなく、「文通」による一対一の関係を重視して、溝上が農村の女性たちと人間関係を紡いでいったことに鬼嶋は注目する。写真家である濱谷を取り上げたことも本書のユニークなところであり、前述した第四の視角に関連している。井上祐子は、戦後の濱谷が残した「人の見逃している、しかし現に存在しているさまざまな人間」(一一五頁)という言葉に着目する。だが、同時に、濱谷は、澁澤敬三の民俗学の影響を受けて「撮影対象となる人を人として尊重し」、「素材として撮らない」という態度をとるようになり、「写す側」と「写される側」の狭間で思い悩んでいた(一一六頁)。「啓蒙する側」と「啓蒙される側」、「写す側」と「写される側」、溝上にしても濱

谷にしても両者の「間隙」で苦悩していた知識人であるといえよう。この「間隙」に対する意識が本書の「知識人」と「民衆」という枠組みそのものを問い直す試みとも関連しており、二項対立的な知識人と民衆の関係に陥らない要因にもなっているであろう。

桑原武夫論では、ほとんど大衆や民衆という概念は用いられていない。内容的にも、桑原の思想を丹念に時代状況のなかで跡づける仕事である。しかし、直接的に桑原の民衆観に言及してはいないが、「第二芸術」(『世界』一九四六年一月)などを論ずるなかで、間接的にそれを窺い知ることができる。民衆観という設定をしながらも、大衆や民衆という言葉に拘泥せず、同時代の政治・社会状況のなかで桑原の思想の特質を描き、それがかえって桑原の民衆観を示唆している。知識人と民衆との距離を考えるうえでも貴重な論文である。神島二郎論では、安丸良夫の神島批判が興味深く、戸邊秀明は「安丸がサークル運動などに見た「民衆的主体性」の系譜は、西洋との距離で達成を測られる価値観ではなく、このような「民衆思想」の発展の延長にこそ望みされるべきものだった」(二四三頁)と指摘する。安丸は「近代的個人の主体性」とは異なる「民衆的主体性」が形成される可能性を戦後日本に見出したのである(二四二頁)。このように神島と安丸の民衆観の相違点に注目しながら、戦後日本における「民衆的主体性」の問題を検討したことは、本書全体のテーマと深く関係している。

赤澤は、戦後思想や知識人の問題を考察するとき、日高六郎の「折々の発言」が示唆的であると語っている。「日高の議論は、日本の民衆の巨大な歴史的体験を重視し、それが優先的価値を選択させる根拠になっていると捉えるもので、その歴史的体験には、戦争体験と高度経済成長による生活の変化があるとするものである」（二三頁）というように。「戦後」という枠組みを用いるとき、どうしても「戦争体験」に力点が置かれることが多い。だが、「高度経済成長」のもたらした「生活変化と意識変化」（二二頁）の問題は、「戦後知識人と民衆観」を検討するとき、今後ますます重要になるだろう。本書では、赤澤の藤田省三論がこの問題を考える糸口を与えてくれている。

（大阪商業大学教授）

知識人とは何か

——出原政雄編『戦後日本思想と知識人の役割』評

黒川 みどり

本書は、同志社大学人文科学研究所に設けられた研究プロジェクト「戦後日本思想の総合的研究」（二〇一〇年四月～一三年三月）の一六本の成果論文集であり、以下の内容から成る。

序論 戦後日本思想への新たな関心の高まり（出原政雄）

第一部 天皇制・ナショナリズム・アジア

第1章 藤田省三の戦後天皇制論（赤澤史朗）／第2章 橋川文三のナショナリズム論（平野敬和）／第3章 竹内好の「アジア」「中国」「日本」（萩原稔）／第4章 「対米自主」の思想（望月詩史）

第二部 平和思想・市民主義・社会科学

第5章 矢内原忠雄の戦後平和思想（出原雅雄）／第6章 生活綴方運動と民衆の思想（長妻三佐雄）／第7章 内田義彦における社会認識の「生誕」（田中和男）

第三部 自由主義と変革思想

第8章 多田道太郎の自由主義（根津朝彦）／第9章 「悔恨共同体」の断層（織田健志）／第10章 「戦後思想」における転向論（福家崇洋）

第四部 戦後文学の思想

第11章 出発点としての「政治と文学」論争（岩本真二）／第12章 昭和の記憶と幕末・維新の「物語」（竹本知行）

第五部 福祉・ジェンダー・反戦・沖縄

第13章 社会連帯思想の戦前・戦後（池本美和子）／第14章 公娼廃止後の娼娼運動（林葉子）／第15章 ベトナム反戦から内なるアジアへ（黒川伊織）／第16章 沖縄独立論の検討（櫻澤誠）

本書は、「戦後日本の「知識人」を「広く解釈」し、①戦前からの著名な知識人、②戦後言論界を代表するような知識人、③名前の知られた学者であるが、まだ本格的な研究が少ない知識